
魔術学院の恋愛事情

香月航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術学院の恋愛事情

【Zコード】

Z0530Z

【作者名】

香月航

【あらすじ】

とある魔術学院のとある平凡な私と、何故か非凡な彼と恋をしたりしなかつたりする…かもしれない話。

こちらは個人サイトで公開している作品の番外編になります。単体でもお楽しみ頂けるように書いて参りますが、詳しい世界観などは大元の作品を「J」確認下さいませ

〇〇・ある放課後の「こと」（前書き）

個人サイト作品の1周年記念？で書いて参ります、息抜き〇〇です。
ゆるーっと適当にお砂糖話をお楽しみ頂ければ幸いです。

〇〇・ある放課後の「」

オレンジ色の日差しが、見慣れた教室の天井を染め上げる。

昼と夜の間、世界の全てが赤になる「」の時間は、とても美しいと思う。

そう、例えそれが“視界を埋める大半”の背景に過ぎないとしても。

「？」を見ている？」

背筋に響く低く甘い声色に、投げかけた思考が連れ戻される。

整った輪郭を滑り落ちるのは、まるで刃のよつな輝く青銀。

対象的に、私の間抜け顔を映すキレ長の瞳は金色^{やっこいろ}。

彩られた内側には、すっと筋の通った鼻と抜群の位置で引き結んだ唇。

あれだ、よーするに、すっぽり美形が

何故か私の超至近距離にいらっしゃいます。

「……」

両手首を捕まれ、背中は後ろの机に縫い付けられたように動かない。整ったお顔は吐息がかかるような距離で、今も刻一刻とその隙間を狭めつつある。

「…あの、先輩。聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「なんで私、名前も知らない先輩に押し倒されているんでしょう？」

01・別世界で生きててくれよ

『魔術』と呼ばれる魔道技術を至上とする王国・ロスヴィータ。この国において、唯一の国立の学び舎であり、その道の最高峰の名門校がある。

才能のある者ならば出自を問わず、15歳から入学が可能。全寮制で、在学期間はどの私立学校よりも長い6年間。

それがこゝ、『ロスヴィータ王立魔術学院』

運よく才能を持つて生まれた私、メリル・フォースターは、運よくこの名門校に入学でき、今年で一年目になる。魔術師として特筆するような部分はないものの、クラスの友達とも寮の相方とも問題なく、日々平穏に暮らしている。

……暮らしていたのだ。

そう、平凡で何もない毎日を楽しく生きていたのだ。

(… はい現実逃避終了)

目を開けば、相変わらずタダに染まつた教室の一角。

至近距離には美形の先輩がいらっしゃる。

一体何がどうしてこうなってしまったのか。

とりあえず、私が投げかけた『知らない』と言つ事實に、先輩は整った形の眉をひそめている。

氣分を害したとしても仕方ない。知らないものは知らないのだから。

「…俺は六年のギルベルト・クラルヴァインだ。それなりに有名なつもりだったが、こんなものか」

「ああ、クラルヴァイン先輩。名前だけ聞いたことがあります、少し」

「そ、そうか」

眉間の皺を一本増やして、深く息をはぐ。

先輩、この距離でため息つかるとすゞしきりですマジやめて。

ともあれ、最上たる六年のクラルヴァイン先輩と言えば、確かに下級生でも聞く名前だ。

クラルヴァイン家は確か、子爵位を賜る貴族でありながら、魔術の名門としてもその名を連ねている。^{つまり}

加えて先輩本人のこの整いまくった容姿とくれば、有名じゃない方がおかしいだろ？

「私のように、なーんの興味も関係もない庶民がいるのも事実だけど。」

「それで、名門家の先輩が一平民の私に何の用でしょ？」

自分で言つのも何だが、私は本ッ当に平凡だ。

普通の家庭で生まれ、普通の娘として育てられ、学院に入れたものの成績は真ん中や下め。

容姿も先輩とは違い、礼賛の言葉には縁遠い。あと貧乳。

どう考へても先輩とは住む世界が違う。

こんな事態になつていては、まず何かの間違いとしか思えない。

「この体制から連想するようなことは、そういうはないのではないか？」

「寝技の練習ですか？」

「斬新な返しだな」

「あとはすつしに田が悪くて、誰かと間違えたとか？」

「あいにくと、視力が下がった覚えはないな。メリル・フォースタ

「一

……残念ながら、呼ばれているのは私の名前だ。
同姓同名の美少女がいると言つ噂も聞いたことはない。

「……お前で呼んでも構わないか？」

「……」

左手の拘束が解かれて、離れた流れのままに指先が頬にふれる。

「すぐすぐつたいです

「じきに慣れる」

ゆっくりと輪郭を滑りおりて、顎の辺りで一度止まる。

軽く上を向かされれば、もう影の重なるような位置にじく顔がある。

視界を埋める男性の姿は、びっくりするほどきれいだ。

赤い日差しが濃い影を落として、より一層整った輪郭を際立たせる。このまま絵画として切り抜いて飾つてしまえるぐらいに。

……なぜかときめきは沸いてこない。

(……瞳に、熱がない)

この上なく近くにいるのに、『観察されてる』とでも言つのだらうか。

ますます美しい色を魅せる金眼は、何の感情も映さずじりじり見ていくる。

「…珍しこ反応をするな」

「やつですか?」

「俺がこの距離までせまつて、無表情を通す女は初めてだ」

「貴方この、色事を構えるような表情ではありますよ」

瞬間、初めて先輩の顔に表情らしい表情が浮かんだ。

わよとん、と。音がしきりにぐらごの、ひよつと間の抜けた驚きが。

「…そんなこと、初めて言われたな」

「いつもの無表情顔で女性にせまつてたんですか。割とひどいですね」

「そんなに酷い顔をしていたのか」

すっと、予想よりもアッサリ拘束が外れる。

大きな影がどいて、開けた視界に鮮やかな夕日がしみた。
いつの間にか紫が混じり始めたそれは、もう間もなく暮れてしまうだろう。

予想以上に時間が経っていたみたいだ。
そろそろ学院を出ないといけないのだけど…

「あの、先輩？」

人の世界を遮断していた男は、何やら少し落ち込んでいる様子だ。
…立つてみると、私よりも頭ひとつ以上背が高い。
腰から下の長さは、もはや嫌味の領域だわ。

「先輩、用事がないのなら私は帰つてもよろしいですか？」

だから、口調に少々トゲがはえてしまつのも、ご容赦頂きたい。
家柄がよくて顔がよくて、おまけにスタイルも抜群とか。どこまで
天にえこひいきされているのだか。

「ああ、悪い。用件を伝えていなかつたな」

「…出来れば口頭で伝えて頂きたかつたですよ」

しかも、先ほどまで初見の女を押し倒していたと言うの。全く平然と。全く、何事もなかつたかのように立っているのが、また腹立たしい。

……私はこの17年の生の中で、あんなことをされたのは初めてだつたのに。

「それで、何のご用事だつたんですか？」

色んなことが重なつて、胸がムカムカしていた。

私はとにかく早く帰りたかった。

住む世界が違うすぎる彼と、これ以上同じ部屋にいたくなかった。

……今になつて思う。

あの時、用件を聞かずにそのまま逃げてしまつていたら、結末は変

わっていたのだろうか。

「では、単刀直入に。
メリル・フォースター、俺の子供を生んでくれ

「…………は？」

02・向も聞かなかつた」と云ひよつか

聞こえなかつたか?とあくまで無表情に問いかける彼に、力の限り言い返したい。

聞こえなかつたことにしていいですか?

否、聞かなかつたことにして今から逃走してもいいだらうか。

ドン引きだ。

いきなり何を言い出すかと思えば、[冗談たわにしても性質たちが悪い、悪す
がれ]。

「メリル・フォースター、返事を……」

「頭おかしいんじゃないですか?」

結局、口をついて出たのは、一番呟つぶたらヤバそうな返答かただった。

(私のばか――――――――)

素直に言つ過ぎたーと慌てて口をふりながら、時すでに遅し。

頭おかしいはマズイだろ？！ 思つても言つたらいけない！

(あ、怒られる…殴られるかも…?)

何せ相手は上級生、それも最上学年。おまけに貴族様である。どひじよひ、こにはひとつ土下座でもするべきか…？

「……あ、あの、先輩？」

恐る恐る顔を見上げる。罵声はまだふっこなこようだけ…

「ん、なんだ？」

「あ、れ？ 怒らないんですか？」

意外なことに、対した先輩は平然とした様子で立つたままだった。静かに怒っている、と言つ雾囲気でもない。

「怒る要素がないだろ？！ 的確な反応だつたから、むしろ感心していた」

(的確つて…)

自分で言つといて『頭おかしい』と思つていたのか。この人、きりつとした外見の割りに、中身は結構天然なかもしない。

「一応弁明をしておきたいのだが、構わないか？」

「え、あ…手短に済むのなら」

視線を動かせば、窓の外はそろそろ赤よりも黒の方が多くなつてきている。

学院の完全施錠まで、そう時間は残つてないはずだ。

善処すると頷いて、手近な机に座つた彼はつまらなそうな無表情のまま話し始めた。

「占術師はわかるか？」

「せんじゅつ…占いの魔術を本職にしている方ですね」

二年のは分野としてしか習つていないが、魔術の中でも特殊なひとつだ。

予知、先見、未来視。呼び名はさまざまだが、明日の天氣から男女の相性・結ばれた先まで、とにかく先を読むことに長けた魔術師を

『占術師』と呼ぶ。

「貴族にはだいたい抱かかえる占術師がいるのだが、先日帰省した際、当家のそれに興味深いことを言われてな」

金眼が私をじらぐ。

射抜くよつた強い視線に、一瞬だけさうとした。

「メリル・フォースター、お前は非常に珍しい体質の持ち主だそうだ。

お前と交わる」と、俺は潜在能力をありますことなく発揮出来るらしく

して

「……

まじわる。

「また、俺達の間にもうけられた子は、類いまれな資質を持つて生まれてくるやうだ

「……ちよ、ちよと待つてやれ。」

「質問があるなら遠慮するな

「質問じゃなくて…

まじわる、で次に出た単語が子供だった。
男女が『交わる』と書つては、もしかしなくてもつまつ……

「あの、もしかして、私を性的な意味で抱くとかそういう話をしていらっしゃいます？」

「ああ、やつだが」

「わや――――――――！」

顔に血がのぼつてくる。この男、やつからサラシとなんてことを言っていたんだ。

弁明も何もないじゃない、まんまでですよ！ 抱かせろって言つてたよ――！

「…なんだ。俺が相手ではそんなに不服か？」

「初対面で不服も何もありません！！ 第一、何の弁明にもなつてませんよ！」

前言はやつぱり撤回しない。この人頭おかしい！

もし彼が普通だと叫うのなら、私はこの国の『貴族』を絶対信じないことにじよつ。

始終無表情で子供生めとか言つてくる男が、普通だなんて認めてなるものか！

「だから言つておるだろつ。交わりに意味があるので」

「意味があろうとなからうと、普通の人間はいきなり抱かせらんて言いません！ そもそもきなり押し倒したりしません！」

そうだ、いきなり押し倒してきたんだ、この人。

意味がそのままだと言つことは、私が抵抗しなかつたら学院でコトに及ぶつもりだつたのか！？

それも初対面の人間と！？

「……変態、強姦魔。学院で変なことしようとか、最低です」

「まだ何もしていのだから、それはさすがに撤回しぃ。雰囲気を作つたら移動するつもりだつた」

説明を後に回して？ その時点で最低じゃない。

それとも、美形様に押し倒されればどんな女も落ちるつてか？

：いや、ありえるわね。この男、外見だけは群を抜いているし。多少怪訝な様子はあれど、悪いことをしたとは思つていないようだし…そういうことなのだろう。

（確信した。彼はまさに、別の世界の人間だ）

深く深くため息をついて……今度は私が彼を見据える。
ここまで聞いたらもう十分だろつ。

「私はもう貴方と話したくありません。失礼させて頂きます！」

「おい待て、メリル・フォースターーーー？」

誰が待つか冗談じゃない。

こんな頭の痛くなるような話にこれ以上付き合つてられるものか！
あげく貞操の危機とか本当に有り得ない。

背後から先輩の呼び声が聞こえていたけど、絶対に振り返らないで走り出す。

持てる力の限りに足を前へ、一歩でも前へ。あの教室から遠くへ。

窓の外はすっかり暗くなっている。

今の時間なら先生達が戸締り確認に巡回しているはずだ。
もし捕まつたとしても、助けてくれる要素はある。

（なんで私がこんな目にあわなきやならないのよ……）

世の不条理さに涙が止まらないながら、階段を駆け下りて、女子寮への帰路を急ぐ。

（悪い夢でありますよ！ 明日は何事もなく平凡でありますよ
う！）

信じたこともないカミサマに祈りながら、汗ばんだ手で扉をじり開け、そのまま力いっぱい閉める。

「よし、逃げ切つたあッ！」

へなへなと座り込んだ私を女子院生達が注目していたが、構つていられる体力はもうなかつた。

疲れた。本当に疲れた。一体なんだつたんだもつ……

とにかく、今田は早く寝よう。すぐにでも寝よう。

今日といつ日をなかつたことにするんだ、うん。

…けれど、私は忘れていたのだ。

祈つた先のカミサマとやらは、あの変態男をえこひいきしまくつていのよしうな存在だと語つことを。

03・せめて夜は静かに（前書き）

本文中に元作品「M a g i c a l P a r t y ! ! 」の人物名が登場しています。

彼らの詳細は、プロフ掲載の個人サイトでご確認下さいませ。

03・せめて夜は静かに

「うわーそりゃまた…えらい面倒」とに巻き込まれたわね」

「でしょ？ 意味わからないわよも」

亞麻色のふわふわした髪をまとめながら、私の相方の少女・モニカが苦い笑いをこぼす。

この学院は全寮制であり、かつ全ての部屋が一人部屋になつていて、とは言え、二人で使うには勿体ないほどの広さがあるし、ベッドにはそれぞれ簡易ながら天蓋てんがいがついている豪華仕様だ。

施設のすばらしさは、まさに国立名門様々である。

在学期間が長いこともあって、寮では一年ごとに相方変更を申請できるのだけど、彼女とは去年から一緒だ。

個人的には、卒業まで一緒に構わないぐらい、私の理解者だと思つていて。

「貴族様のお戯れならいいんだけどね…」

寝転がる私の頭を、ふつくらとした手が撫でてくれる。

あーホントに、彼女が相方で良かつた。平凡ながら、私はつくづく友人関係に恵まれている。

「慰めてあげたいけどね。クラルヴァイン家って言つのが、冗談の線薄いかも」

「なに？ 問題のある家なの？」

「問題つていうかね……」

言い淀みつつも心当たりがあるのだろう。

モニカは我関せずの私と違い、学年内でもかなりの情報通だ。

私が起き上がって姿勢を正すと、大きめ眼鏡をくいつと持ち上げて彼女も真面目な表情になった。

「貴族としては問題ないわ。むしろ安定してるから、玉の輿狙いならオススメ」

「別に狙つてない」

「欲がないわね。まあそつちは問題ないんだけど、魔術師としてはね……最近ふるつてなかつたみたいだから」

「……そうなの？」

魔術師と言つのは、まず生まれ持つた才能がものを言つ。

先天性のソレがなかつた場合は、どんなに努力しても魔術を扱うことは出来ないので。

しかも、遺伝する条件が極めて曖昧で、名門血筋でも受け継がないこともあるし、無関係の平民からポツと生まれることもある。

もちろん、『名門』と呼ばれる家はその対策もしているのだうな
ど…

「衰退つて言つほどではないけどね。あそこは、子爵と魔術名門の
一枚看板でやつてくる家だから。片方でも傾くと結構痛手になる
のよね」

「ああ、確かに」

どちらか一つでも十分凄いことだが、ここまで両方を掲げてしまつ
た以上、後には引けないのはなんとなくわかる。

有名な家は有名な家で、色々と大変そうだ。…私には関係ないけれ
ど。

「ギルベルト先輩… いえ、『次の当主』は当たり株っぽいからね。
期待も義務も大きいんじやないかしら」

「あの変た…ごめん。の人、優秀なの?」

“あのクラスでなければ”首席も狙えたぐらいの実力者よ

「…………ああ」

モニカが強調した言葉に、今度こそ少し同情してしまった。
と言つのも、今の六年生…先輩が在籍しているクラスは、長い学院
の歴史から見ても異常なのだ。

まず『一大名門家』の人間がいる時点で積んでいる。クラルヴァイン家も名門だけど、全然レベルが違う。

国の双璧、魔術師の頂点と呼ばれる最高峰のひとつ『キルハインツ本家』

現在の首席は、そこの次期当主様なのである。

学年をいくつも飛び級した上で首席だそうで、劣等寄りの私には想像もつかない世界だ。

で、次席の生徒もそれに劣っていない。キルハインツ氏が飛び級して来るまでは、ぶつちぎりの成績だつたそうだ。

名門出ではないけれど、すでに王城からお誘いが来ているぐらいの実力者。

名前はキンバリー先輩。周囲に無関心の私でも知っているぐらい有名な人達だ。

「あの二人がいたら、少なくとも一位・二位は狙えないわね…」

「その二人は当然凄いけど、女子にも凄いのいるからね、あのクラス

「なにそれ？」

「公式成績がないって言つか…隠してるのかもしれないんだけどさ。先月と、つい数日前にあのクラスに転入生が来ててね。二人ともキ

ルハインツ格のトンデモ魔術師らしいよ

なんだそれは。

あのクラスは魔王城か何か！？

「化け物の巣窟じゃない…」

「ああ、そんな感じよね～」

先輩を化け物呼ばわりするのはどうかと思つけど、見習いにもなれていない私達にはそんな感想しか抱けない。

そりやあ、多少優秀な程度では埋もれてしまつだらう。

名門の家名を背負つてゐる者としては、楽しい状況ではないはずだ。

「だからって、知りもしない先輩のために処女捧げられるほど、私は博愛主義者じゃないわよ」

「家も顔のレベルも問題ないんだから、それなりに有りだとは思つけどね」

「じゃあモニカ変わつてよ。夢見がちでもなんでも、私は愛情がないと無理」

よく知りもしない先輩のために、処女捧げて子供生むなんて絶対に嫌だ。

しかも、顔は良くても無表情の常識破り…変態の相手なんてごめんこつむる！

「諦めてくれるとこにわね」

「本当にね……」

ため息だらけの空氣に包まれながら、結局だらだら雑談をしてから
眠った。

いつもの日常を堪能してから眠れば、今日の出来事はただの珍事件
として全部忘れてしまえると思った。

けれど翌日、私の期待は真逆に裏切られる」とになる。

「ねえねえ、女子寮の前にすごいカツコイイ人いるんだけど」

「あれ、六年のギルベルト先輩じゃん！ 誰よ待たせてるのー！」

「…………」

「…どうするのよ、待たせてる人」

朝一番、日差しの中でキラキラと輝くイケメンの登場に、浮き足だつ年頃の女子院生達。

その後ろで、お通夜のよつな空氣の私達。

何がどうして貴方そこにいるのさ。

「メリル、ビーすんの？」

「人違いでしょ？」

「そうだと願うしかない。」

ほら、イケメン待たせてる美少女さん、早く行ってあげてくれよ！

ナガシ、寺でビも寺でビも美少女な流せ。あ。

寮から出てくる女子達を、無表情のままで眺めては首をかしげるばかりだ。

時折、好奇心に負けた院生が話しかけているが、異様なまでにそつ
けなくあしらっている。

「人違いだと思いたいけど、あたしは業者用出入口を薦めるわね」

モニカの提案に深く頷いて、黄色い声をあげる院生達とは逆方向へ歩き出す。

小さくふられた手が、まるで戦地へ赴くような気分にさせてくれた。

奇跡みたいな幸運で入学できた魔術学院、卒業までは私なりに精一杯頑張ろうと決めていた。

けれどこの日、初めて私の頭の中に無断欠席モーサボラウガナと言つ言葉が何度も浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0530z/>

魔術学院の恋愛事情

2011年12月5日22時53分発行